

■ 書 評 ■

聴神経腫瘍 [DVD 付]

— Leading Expert による Graphic Textbook

佐々木富男 ● 編

村上信五 ● 編集協力

太平洋脳神経外科コンサルティング代表／

新さっぽろ脳神経外科病院名誉院長 端 和夫

佐々木富男先生の『聴神経腫瘍』が医学書院から出版された。

第1の特徴は、よくぞ日本語で出版して下さった、ということである。佐々木先生は米国の留学経験が長く、英語には抵抗はなかったはずで、もし先生がその気になれば、ひょっとすると英語の本になっていたかもしれない。しかし読む側には日本語のほうがありがたい。基礎医学と違って、臨床医学は国民医療が問題である。発展途上国ではあるまいし、そのための情報を英語で読まなければならないバカバカしさは、英語になった『Neurologia medico-chirurgica』を読むときの感じと同じである。国際的な名声を求めず、日本語で出版されたことに拍手を送りたい。

第2は、この本はまさに聴神経腫瘍を摘出するための本であるということである。摘出に必要な知識は詳しく書かれているが、それ以外のことは最小限にとどめてあり、読むほうは、煩雑な知識の羅列、例えば発生学や組織学的分類などにうんざりすることなく、すぐに摘出の問題に集中できる。この腫瘍は上手に摘出さえできれば解決する、それを決めるのは術者の技量である、という著者の気概が感じられる誠にケレンミのない記載は好感が持てる。そして、きれいな術中写真と図が多く、読みだすと止まらなくなり、割合簡単に最後まで読める。

第3は、解説が具体的で、豊富な経験に基づくことが感じられることである。「内減圧中の出血を凝固したのち、生理的食塩水で頻回に洗浄して熱で顔面神経が障害されるのを防ぐ」という記載や、「細心の注意を払って顔面神経を腫瘍から剥離してゆくと、突然、透見できるほど薄くfanningした顔面神経が内耳孔方向へ立ち上っていた」などの記載の背景には、それぞれ苦労した経験があることが感じられ、まるで手術場で、佐々木先生から直接感想を聞いているようである。

顔面神経や聴神経の機能を温存するために、腫瘍の被膜を残して、「subcapsularあるいはsubperineurial dissectionをする」という記載が多く、場面登場する。組織学的な理論づけもある。これは大変重要な戦略で、建前にこだわらず、勇気を持ってこのことを強調された書き方には共感を覚える。おそらくある程度の経験を持つ脳神経外科医が読めば、自分が行った手術の場面が自然に目に浮かんできて、今度は上手くやろうと改めて思うかもしれない。

第4は、従来あまり触れられていなかった術後の耳鳴りや味覚障害について書かれていることである。読者は今後、聴神経を下手に残すと耳鳴りだけが温存される、という俗説に惑わされずに済むことであろう。また、顔面神経麻痺が残ったときの

対応の記載も具体的である。ガンマナイフ治療の章もあり、正直な効果と問題点が明らかにされている。

第5は、translabrynthineとmiddle fossa approachによる手術が、名古屋大学耳鼻科の村上信五先生によって書かれていることである。やはりきれいな写真と図がたくさんあり、歯切れのよい村上先生の解説は非常にわかりやすい。ところどころに手術のコツがアドバイスとして書かれていて、ひとつ自分でもやってみようかという誘惑に駆られるほどである。しかし、教科書を読んだだけでこのアプローチをやってみようというのは蛮勇で、やはり最初の数回は耳鼻科の先生と一緒に無難であろう。その後は、本書を読みDVDもよくみれば、おそらく大丈夫ではなかろうか。

最後は何といっても手術のDVDが付いていることである。術野に出血の少ない手術はMalis先生やSamii先生のビデオが有名であったが、佐々木先生、村上先生の手術も大変きれいな術野である。

聴神経腫瘍に関係する解剖的構造は複雑ではあるが、十分把握できる程度であり、規則性もかなり高い。画像診断やモニタリングも進歩した。正しい計画と戦略で手術し、出血に煩わされずに切除や剥離すべきものをよく見て、心を落ち着けて、慎重、丁寧に操作すれば、聴神経腫瘍の摘出に成功する確率が高い。そのためにこの本を読んで患者の役に立ってほしい、というメッセージが読後に伝わってくるようである。

A4判, 160頁, 2009年

定価 23,100円

(本体 22,000円 + 税 5%)

[ISBN 978-4-260-00806-8]

医学書院刊